

Lemma 0.0.1

X を位相空間、 $B \subset A \subset X$ とする。

$$i : A \longrightarrow X, j : B \longrightarrow A$$

がともに、cofibration であるならば、 $k = i \circ j : B \longrightarrow X$ も cofibration である。

proof) 次が可換とする。

$$\begin{array}{ccc}
 B & \xrightarrow{i_0} & B \times I \\
 \downarrow k & \nearrow f & \downarrow \\
 X & \xrightarrow{i_0} & X \times I
 \end{array}$$

$\begin{array}{ccc} & & H \\ & & \nearrow \\ & Y & \\ & \nearrow & \\ & & \end{array}$

このとき、 j が cofibration より、次の可換図において

$$\begin{array}{ccc}
 B & \xrightarrow{i_0} & B \times I \\
 \downarrow j & \nearrow f|_A & \downarrow \\
 A & \xrightarrow{i_0} & A \times I
 \end{array}$$

$\begin{array}{ccc} & & H \\ & & \nearrow \\ & Y & \\ & \nearrow & \\ & & \exists G \end{array}$

を可換にする $G : A \times I \longrightarrow Y$ が存在し、 i が cofibration より、

$$\begin{array}{ccc}
 A & \xrightarrow{i_0} & A \times I \\
 \downarrow i & \nearrow f & \downarrow \\
 X & \xrightarrow{i_0} & X \times I
 \end{array}$$

$\begin{array}{ccc} & & G \\ & & \nearrow \\ & Y & \\ & \nearrow & \\ & & \exists F \end{array}$

に対し、

$$\exists g : X \longrightarrow B \quad s.t \quad f \simeq g \text{ rel } A$$

proof) $-1 \leq k$ に対し、

$$g_k : \overline{X}^{(k)} \longrightarrow B \quad s.t \quad f \simeq g_k \text{ rel } A$$

の存在を k に関する帰納法で示す。

$-1 \leq k \leq m$ のとき、 $\overline{X}^{(k)}$ に対し、

$$g_k : \overline{X}^{(k)} \longrightarrow B$$

を次で定義する。仮定より、 $\overline{X}^{(k)} \subset A$ であるため、 $\overline{X}^{(k)} = A$ より、 $g_k = f$ とおくと題意を満たす。よって、 $m < k < n$ に対し、

$$\exists g_k : \overline{X}^{(k)} \longrightarrow B \quad s.t \quad f \simeq g_k \text{ rel } A$$

が存在すると仮定する。このとき、

$$H : \overline{X}^{(k)} \times I \longrightarrow Y$$

を f と g_k を繋ぐホモトピーとすると、次の可換図、

$$\begin{array}{ccc} \overline{X}^{(k)} & \xrightarrow{i_0} & \overline{X}^{(k)} \times I \\ \downarrow i & \nearrow H & \downarrow \\ X & \xrightarrow{i_0} & X \times I \end{array}$$

Y

f

を考えると、 $\overline{X}^{(k)} \hookrightarrow X$ が cofibration であるため、次を可換にする写像が存在する。

$$\begin{array}{ccc} \overline{X}^{(k)} & \xrightarrow{i_0} & \overline{X}^{(k)} \times I \\ \downarrow i & \nearrow H & \downarrow \\ X & \xrightarrow{i_0} & X \times I \end{array}$$

Y

f

\tilde{H}

よって、 $f_k = \tilde{H}_1 : X \rightarrow Y$ とおくと、

$$f_k(A) = \tilde{H}_1(A) = H_1(A) = g_k(A) \subset B$$

であるため、 $f_k : (X, A) \rightarrow (Y, B)$ であり、また、 $f_k \simeq f \text{ rel } A$ である。

$$\varphi_\lambda : (D^{k+1}, S^k) \rightarrow (\bar{X}^{(k+1)}, \bar{X}^{(k)})$$

を $X - A$ の $k + 1$ 次元 cell の特性写像とする。

$$f_k \circ (\cup \varphi_\lambda) : \coprod (D^{k+1}, S^k) \rightarrow (Y, B)$$

各 $f_k \circ \varphi_\lambda \in \pi_{k+1}(Y, B) = 0$ であるため、

$$\exists h_\lambda : D^{k+1} \rightarrow B \quad s.t. \quad f_k \circ \varphi_\lambda \simeq h_\lambda \text{ rel } S^k$$

よって、 $h = \cup h_\lambda$ とおくと、 $f_k \circ (\cup \varphi_\lambda) \simeq h \text{ rel } \coprod S^k$ 。これより、

$$g_{k+1} : \bar{X}^{(k+1)} \cong \bar{X}^k \cup (\coprod D^{k+1}) \xrightarrow{f_k \cup h} B$$

が、定義される。これは、 $g_{k+1} \simeq f_k \text{ rel } \bar{X}^{(k)}$ なので、 $g_{k+1} \simeq f \text{ rel } A$

よって、 $k \geq n$ のときは、仮定により、 $\bar{X}^{(k)} = \bar{X}^{(n)}$ であるため、 $g_k = g_n$ で定義すればよい。これより、すべての k において、 g_k が定義できた。よって、

$$g = \text{colim } g_k : X \rightarrow B$$

に対し、 $f \simeq g \text{ rel } A$ である。

(注：定義域、値域等があってないところが多々あるが、inclusion や制限を省いている。)

Corollary 0.0.5

$m, n \in \mathbf{Z}$ において、 $0 \leq m < n \leq \infty$ とする。 $(X, A) : \text{CW pair}$ で、 (Y, B) を空間対とする。 $X - A$ の任意の胞体 e は $m \leq \dim e \leq n$ であるとし、さらに、 $m \leq i \leq n + 1$ に対し、 $\pi_i(Y, B) = 0$ と仮定する。このとき、

$$f : (X, A) \rightarrow (Y, B)$$

に対し、

$$g: X \longrightarrow B \quad s.t \quad f \simeq g \text{ rel } A$$

は A をとめて homotopic を除いて一意に存在する。

proof) 存在は Theorem 0.0.4 で示した。よって、

$$g, h: X \longrightarrow B \quad s.t \quad f \simeq g, f \simeq h \text{ rel } A$$

とする。このまま素直に推移的に示せないのは、正確に言えば、 $i: B \longrightarrow Y$: inclusion に対し、 $f \simeq i \circ g, f \simeq i \circ h \text{ rel } A$ に注意しなければならないからだ。しかしこれより、 $i \circ g \simeq i \circ h \text{ rel } A$ は言えるため、この homotopy は、

$$H: (X \times I, X \times \partial I \cup A \times I) \longrightarrow (Y, B)$$

と見なすことができる。ところで、 $(X \times I, X \times \partial I \cup A \times I)$ は CW pair であり、 $\times I$ されたことで、 $X \times \partial I$ 以外の胞体の次元がもとの X に比べ $+1$ されたことに注意すれば、 $X \times I - X \times \partial I \cup A \times I$ の任意の胞体 e の次元は $m+1 \leq \dim \leq n+1$ である。仮定より、 $m \leq i \leq n+1$ に対し、 $\pi_i(Y, B) = 0$ なので、Theorem refexists が用いることができ、

$$\exists G: X \times I \longrightarrow B \quad s.t \quad G \simeq H \text{ rel } X \times \partial I \cup A \times I$$

これより、 $g \stackrel{G}{\simeq} h \text{ rel } A$ である。

Proposition 0.0.6

(X, A) は CW pair で $\dim(X - A) \leq n$ とする。 B が $(n-1)$ 連結ならば、任意の連続写像

$$f: A \longrightarrow B$$

は X 上に拡張できる。

proof) $k \geq -1$ に対する帰納法を用いる。 $k = -1$ のとき、 $A = \overline{X}^{(-1)}$ であるため、 $f_k = f: \overline{X}^{(-1)} \longrightarrow B$ と見なせばよい。 $-1 < k \leq n-1$ に対し、

$$f_k: \overline{X}^k \longrightarrow B$$

が f の拡張とする。このとき、 $X - A$ に含まれる次元 $k + 1$ の cell の特性写像、

$$\varphi_\lambda : (D^{k+1}, S^k) \longrightarrow (\overline{X}^{(k+1)}, \overline{X}^{(k)})$$

に対し、 $f_k \circ \varphi_\lambda|_{S^k} : S^k \longrightarrow B$ を考えると、 B が $n - 1$ 連結であるので、 $f_k \circ \varphi_\lambda|_{S^k}$ は D^{k+1} に拡張可能である。それを、 $g_\lambda : D^{k+1} \longrightarrow B$ とおく。

$$f_{k+1} = f_k \cup (\cup g_\lambda) : X^{(k+1)} \cong X^k \cup (\coprod D_\lambda^k) \longrightarrow B$$

と定義すると、これもまた f の拡張である。よって、 $k = n - 1$ のとき、

$$f_n : \overline{X}^{(n)} = X \longrightarrow B$$

は f の拡張である。

Corollary 0.0.7

(X, A) は CW pair で $\dim(X - A) \leq n$ とする。 B が $(n - 1)$ 連結ならば、任意の連続写像

$$f : A \longrightarrow B$$

は A を止めて homotopic を除き X 上に一意に拡張できる。

Theorem 0.0.8

X, Y を位相空間とし、 K を CW 複体とする。 $f : X \longrightarrow Y$ が n 同値 ($1 \leq n \leq \infty$) ならば、

$$f_* : [K, X]_* \longrightarrow [K, Y]_*$$

は、 $\dim K < n$ のとき単射であり、 $\dim K \leq n$ のとき全射である。

proof) M_f, X, Y の関係は、

$$\begin{array}{ccc} X & \xrightarrow{i} & M_f \\ & \searrow f & \nearrow j \\ & & Y \end{array}$$

は homotopy 可換であり、

$$\begin{array}{ccc} X & \xrightarrow{i} & M_f \\ & \searrow f & \nearrow r \\ & & Y \end{array}$$

は可換である。また、 j と r 互いに homotopy equivalence である。 (M_f, X) の homotopy 完全列を考えると、 $m \leq n$ に対し、

$$\pi_m(X) \xrightarrow{\cong} \pi_m(M_f) \longrightarrow \pi_m(M_f, X) \longrightarrow \pi_{m-1}(X) \xrightarrow{\cong} \pi_{m-1}(M_f)$$

という状況にあり、 $M_f \simeq Y$ と準同型定理を用いると、 $\pi_m(M_f, X) = 0$ であることがわかる。よって、 (M_f, X) は n 連結である。では、本題の証明にはいる。まずは、

$$[\alpha], [\beta] \in [K, X]_* \text{ に対し、 } f_*[\alpha] = f_*[\beta]$$

と仮定する。つまり、 $f \circ \alpha \simeq f \circ \beta$ なので、この homotopy を、 $H : K \times I \longrightarrow Y$ とすると、これは、

$$j \circ H : (K \times I, K \times \partial I \cup \{*\} \times I) \longrightarrow (M_f, X)$$

と見なすことができる。 $\dim K \leq n-1$ とすると、 $K \times I - K \times \partial I \cup \{*\} \times I$ に含まれる任意の胞体の次元は n 以下である。よって、Theorem 0.0.4 により、

$$\exists G : K \times I \longrightarrow X \quad \text{s.t.} \quad j \circ H \simeq G \quad \text{rel } K \times \partial I \cup \{*\} \times I$$

であり、 $\alpha \stackrel{G}{\simeq} \beta$ なので、 $[\alpha] = [\beta]$ 。これより f_* は $\dim K \leq n-1$ のとき、単射。そして、 $[x] \in [K, Y]_*$ に対し、 $j \circ x : (K, *) \longrightarrow (M_f, *)$ を $j \circ x : (K, *) \longrightarrow (M_f, X)$ と見なすと、 $\dim K \leq n$ のとき、Theorem 0.0.4 により、

$$\exists y : K \longrightarrow X \quad \text{s.t.} \quad j \circ x \simeq i \circ y$$

これより、 $f_*[y] = [f \circ y] = [r \circ i \circ y] = [r \circ j \circ x] = [x]$ よって、 f_* は $\dim K \leq n$ のとき全射である。

Theorem 0.0.9 Whitehead Theorem

X, Y : CW 複体とする。 $f : X \longrightarrow Y$ に対し、

$$f : \text{homotopy equivalence} \iff \text{weak equivalence}$$

proof) \implies は明らか。 \impliedby を示していく。任意の CW 複体 K に対し、Prop 0.0.8 により、

$$f_* : [K, X]_* \longrightarrow [K, Y]_*$$

が同型となる。よって、 $K = Y$ とおくと、 $f_* : [Y, X]_* \rightarrow [Y, Y]_*$ が同型なので、 $[1_Y] \in [Y, Y]_*$ に対し、

$$\exists [g] \in [Y, X]_* \quad s.t. \quad f_*([g]) = [f \circ g] = [1_Y]$$

つまり、 $f \circ g \simeq 1_Y$ 。また、 $[g \circ f] \in [X, X]_*$ に対し、

$$f_*[g \circ f] = [f \circ g \circ f] = [f] = f_*[1_X]$$

において、 $f_* : [X, X]_* \rightarrow [X, Y]_*$ もやはり同型だから、 $[g \circ f] = [1_X]$ 。これより、 $g \circ f \simeq 1_X$ 。よって、 f は homotopy equivalence